

協同組合研究誌「季刊」

にじ

2018 AUTUMN No.665



特集

「協同組合と文化」  
座長:杉本 貴志

巻頭座談会

「SDGsと協同組合」(後編)

北川 太一・国谷 裕子・菅野 孝志

一般社団法人  
日本協同組合連携機構

Japan Co-operative Alliance

## 目次

### 【オピニオン】

- 「協同」という文化……………大高 研道…………… 1  
(明治大学 教授)
- 日本協同組合連携機構設立記念特別巻頭座談会  
「SDGsと協同組合」(後編)……………北川 太一・国谷 裕子・菅野 孝志…………… 2  
(福井県立大学 教授)(国連食糧農業機関 (FAO) 親善大使 (日本担当))(ふくしま未来農業協同組合 代表理事組合長)

### 【特集企画】 協同組合と文化

- 特集解題……………杉本 貴志…………… 17  
(関西大学 教授)
- 協同組合の文化：その概念とプロセス……………中川 雄一郎…………… 19  
(明治大学 名誉教授)
- 非営利企業が文化・芸術活動の維持・振興に果たす役割……………佐藤 敦子…………… 31  
(高崎経済大学 准教授)
- 協同組合と文化・芸術～文化事業と文化支援のあり方を探る……………杉本 貴志…………… 39  
(関西大学 教授)
- 農村と「家の光」の風雪100年-草の根の夢と現実の狭間……………大金 義昭…………… 51  
(文芸アナリスト、食料・農業・農村ジャーナリスト)
- 日本で唯一の映画の生協-みやこ映画生協の歴史と現在-……………榎桁 一則…………… 61  
(みやこ映画生活協同組合 常務理事)
- 「民俗芸能と農村生活を考える会」等による都市農村交流  
～新たな取組みの「民俗芸能 NOW! inしまね」への挑戦～……………木本 和男…………… 71  
(全国農協観光協会 総務部長)
- 東京俳優生活協同組合(俳協)の革新に学ぶ協同組合と文化の関わり……………阿高 あや…………… 78  
(日本協同組合連携機構 副主任研究員)
- 労働金庫と文化活動支援  
～協同組織金融機関としての社会的役割発揮に向けて～……………安藤 栄二…………… 88  
(全国労働金庫協会 常務理事)

### 【連載】 協同組合を学ぶ

- 愛媛県協同組合協議会(EJC)による大学提供講座と職員教育……………黒河 安徳…………… 96  
(愛媛県協同組合協議会事務局 JA 愛媛中央会総合企画部 協同活動担当部長)
- 協同するとは何かを学ぶ「インターンシップ@協同組合」  
事務局としての取り組み 3/5……………片畑 智子…………… 104  
(くらしサポート・ウィズ)

### 【書評】

- 大澤真幸・稲垣久和著『キリスト教と近代の迷宮』2018年(春秋社)……………石田 正昭…………… 113  
(龍谷大学 教授)
- 西川潤、マルク・アンベール編著  
『共生主義宣言～経済成長なき時代をどう生きるか』2017年(コモンズ)……………田中 夏子…………… 123  
(日本協同組合学会 会長)

### 【協同のひろば】

- 第96回国際協同組合デー記念中央集会・  
都道府県協同組合連携組織全国交流会議を開催……………日本協同組合連携機構 協同組合連携部…………… 128

- 編集後記……………菊地 登…………… 135  
(日本協同組合連携機構 常務理事)

# 特集解題



杉本 貴志

Sugimoto Takashi  
関西大学 教授

協同組合人からして見れば、協同組合が組合員の経済的・社会的・文化的なニーズに応え、その3側面での地位の向上のために存在することは自明であろう。国際協同組合同盟も、1995年に「協同組合のアイデンティティ」とは何なのかを宣言するなかで、それをはっきりと表明している。

しかし、こうした協同組合の定義づけにあたっては、一部の国から異論も提出されたといわれているし、今なお協同組合がその事業と運動において「文化」を課題としていることは、建て前としてはともかく、実質的には重視されているとはいい難いという状況もあるのではないか。

端的に言えば、本誌のような協同組合関係の雑誌において専ら語られるのは、協同組合の組合員の経済生活であり、協同組合が展開する社会運動であって、そこに「文化」が登場することは、稀とは言わないにしても非常に少ないのである。

こうした状況を踏まえつつ、本号ではあえて協同組合が切り拓く「文化」事業と「文

化」活動の可能性を特集した。「文化」という領域は、営利企業よりもむしろ非営利の組織に適合性が高い世界であり、しかし政府や自治体がそこに介入することが財政難等の理由からますます困難性を増している世界でもある。それは要するに、「文化」という分野は民間でありながら非営利である協同組合の可能性や協同組合への期待が高まっている分野だということに他ならない。

佐藤敦子「非営利企業が文化・芸術活動の維持・振興に果たす役割」は、オペラや歌舞伎を主たる分析の対象として、「協同組合の仕組みの活用を含め、非営利企業が文化・芸術のフィールドでイノベーションを起こしていく可能性は従来以上に高まっている」と説く。そして中川雄一郎「協同組合の文化：その概念とプロセス」では、文化・教育活動で有名なロッチデールの先駆者組合の創立時にまでさかのぼるとともに、2016年にはドイツからの推薦で「ユネスコ世界無形文化遺産」に協同組合に集まる人々の実践が選定された

ことに触れ、協同組合のアイデンティティは「協同組合文化」にあるのだと確認される。また杉本貴志「協同組合と文化・芸術～文化事業と文化支援のあり方を探る」は、オーケストラ音楽などの伝統的文化がヨーロッパでは主として公的補助金、アメリカでは民間からの寄付金によって支えられている現状を紹介しつつ、そこに協同組合という方式を導入する可能性を提起する。

実際に日本の協同組合運動においても、これまでさまざまな形で、組合員と地域の文化活動の振興が図られてきた。

櫛桁一則「日本で唯一の映画の生協～みやこ映画生協の歴史と現在」が報告するように、生協陣営は安心・安全な「食」だけでなく映画文化も地域の組合員に供給してきたし、阿高あや「東京俳優生活協同組合(俳協)の革新に学ぶ協同組合と文化の関わり」では、労働者協同組合法が未だ存在しない日本においても、創意と工夫によって、俳優・声優やマネージャーが自分たちの芸能プロダクションを協同組合(生協)として立ち上げ、維持することに成功してきた歩みが紹介されている。

一方、農協陣営は、社団法人を設立することによって、農村生活とその文化を支えてきた歴史を誇っている。家の光協会の設立以前から実に100年近くの伝統を重ねてきた『家の光』誌の変遷について、大金義昭「農村と『家の光』の風雪100年～草の根の夢と現実の狭間」は時代の変化が誌面に何をもたらしたのかを描き、木本和男『民俗芸能と農村生活を考える会』等による都市

農村交流～新たな取組みの『民俗芸能NOW! in しまね』への挑戦」は、全国農協観光協会が取り組む農村の民俗芸能に対する保存・支援活動を紹介している。

そもそも組合員組織であることは、協同組合にとって、時には大きな利点であるけれども、時には大きな制約にもなることであるが、協同組合自体による文化事業の展開や、協同組合が設立した団体による文化振興活動のほかにも、協同組合は融資や助成といった形で地域の文化活動に寄与することができる。安藤栄二「労働金庫と文化活動支援～協同組織金融機関としての社会的役割発揮に向けて」は、国際協同組合同盟によるアイデンティティ宣言を受けて「ろうきんの理念」をあらためて策定した労働金庫が文化の支援活動をいかに展開してきたかのレポートである。

農林水産業や小売流通業、金融業などにおいて、協同組合は市場経済や自由競争は万能ではないことを主張してきた。経済学の名の下で、その主張はしばしば無視され、嘲笑されさえしてきたけれども、文化という領域において、自由競争万能論を説く文化経済学者はいないだろう。そういう意味で、実は協同組合に最も大きな期待が寄せられるのは「文化」というフィールドなのではないかと筆者は考えるのである。協同組合とは、組合員と地域の経済的向上以上に、文化的向上に貢献できる事業であり、運動であり、組織である。本特集を読まれて、読者はどう感じられるだろうか。